

誕生

2019年
3月チームで地域の課題解決を目指す
スペシャリスト

地域共生 推進士

専門職として地域のさまざまな課題を発見し、他の専門職と協働して解決に向けて取り組むことができる人材。それが「地域共生推進士」です。

地域が抱える問題は、特定の専門職の力だけで解決できるものではありません。さまざまな専門性をもって多面的に課題をとらえ、総合的な解決策を提案することが必要です。

そこで2015年、「域学共生」の一環として立ち上げた地域共生推進士養成プログラムでは、それぞれの学部で専門性を磨くとともに、キャンパスを飛び出して地域に入り、地域の課題に向き合います。その4年間の学びの証明が、「地域共生推進士」の称号です。

2019年3月、最初の地域共生推進士が誕生します。

4年間のプログラム修了後、
認定書が発行されます

取得は3段階

地域共生推進士養成プログラム

共通教養教育科目	学 年	単位数
地域学概論(必修)	1年	2
地域学実習Ⅰ(必修)	1年	1
地域学実習Ⅱ(必修)	2~3年	1
専門職連携論	2~3年	2
チーム形成論	2~3年	
域学共生実習	4年	1
専門教育科目	学 部	単位数
土佐地域文化資源論(方言)	文化	2
地域づくり論		
観光まちづくり論Ⅰ		
地域保健政策	看護	2
地域看護の動向と課題		
地域の健康と看護		
地域福祉論Ⅰ	社会福祉	2
地域福祉論Ⅱ		
社会調査の基礎		
地域健康論	健康栄養	2
公衆衛生学		
公衆栄養学Ⅰ		
域学共生フィードワーク	文化	1
地域看護実習	看護	
地域福祉活動	社会福祉	
地域公衆栄養学実習	健康栄養	

1回生▶体験

1回生で地域課題について学際的に探究する「地域学」を概論で学ぶとともに、その知識を基礎に、実際に地域で体験活動などを行う「地域学実習Ⅰ」を必修科目として履修します。

2・3回生▶実践的トレーニング

2・3回生では実習地域や課題を学生自身が設定する必修科目「地域学実習Ⅱ」のほか、「専門職連携論」「チーム形成論」を選択科目として受講。合わせて、各学部での専門教育科目で専門性を高めます。

4回生▶協働の実践参画

4回生では「域学共生実習」として、教職員と協働し大学が実践している地域課題解決のための取り組みに参画します。

理解	「高知を知ろう!」 地域学概論(必修)
経験	「高知のいろんな地域に行ってみよう!」 地域学実習Ⅰ(必修)
発想	「高知の課題を見つけよう!」 地域学実習Ⅱ(必修)
発展	「学部をこえて協働しよう!」 専門職連携論・チーム形成論
実現	「他学部とも連携して、地域で専門性を活かしてみよう!」 域学共生実習(4年次履修)

プログラム修了後は 学びの証明として 認定書を発行

地域共生推進士と認定し、卒業時に認定書を発行します。地域課題に取り組むための知識や実践を学んだことを証明するための高知県立大学独自の称号です。就職活動などでは志望企業に提出する履歴書の学歴欄に、「地域共生推進士 認定見込み」(卒業後は「認定」と記入することができます。地域共生推進士は、地域課題解決のための高い可能性を有する卒業生にのみ授与される称号であり、すでに「地域学実習Ⅰ・Ⅱ」や大学が行っているさまざまな地域連携の実績が県内に浸透していることから、**学びの確かさを裏付ける称号**と言えます。

こんなことを学習します

地域学実習Ⅰ

1回生が地域活動の基本を学ぶ実習。カリキュラムの目的は地域と向き合うことです。1グループ15名で24テーマの課題に分かれ、高知県内の各地域で学習します。課題は防災や地域活性化、観光振興などさまざま。事前・事後学習のほか、地域で3日間活動します。現地での見学や住民との交流などを行い、地域の現状や課題を実感。地域活動に取り組むことの意義を考えます。



地域学実習Ⅱ

2・3回生が必修で行う実習Ⅱでは、学生自身が地域の課題や問題を見つけ、解決に向けた活動を計画、実行、評価します。実習グループの形成や実習地域との交渉なども学生が行う、主体性に重点を置いたカリキュラムです。実際に地域に入って活動を行う時間を32時間以上に設定。計画書、評価・報告書の制作を行うなど、課題解決に取り組みながら、地域活動の一連の流れを学びます。



地域学実習Ⅱ 成果物

チーム力

多くの専門職が協働で地域の課題解決にあたる場合、必要になるのが、チームとしてまとまり、活動していくための力です。そうしたチーム力を養うための科目が、4学部の学生が受講する「専門職連携論」と「チーム形成論」です。専門職連携論では複数の専門職が連携するために必要な知識や具体的な実践方法などを学びます。また、チーム形成論では、チーム形成やチーム活動などについて、学部の枠を越えてグループディスカッションなどを行い、学びを深めます。

卒業と同時に実践力を身につけたプロフェッショナルな人材が生まれます



地域教育研究センター
共通教育部会長
一色 健司 教授

大学での学びと体験が地域での活躍を支える力になる

学生の皆さんは卒業後、地域社会で職場に入ります。地域共生推進士を目指した学びは、社会人としてスタートする際のアドバンテージになると思います。

地域の課題にいかに向き合うかという時に、課題を発見するという最初の段階から実践にいたるまで、その経験があるのとないのでは大きな差がつくでしょう。

たとえば地域学実習Ⅱでは、仕事を進める上での基本であるP(PLAN)計画)D(DO)実行)C(CHECK)評価)A(ACTION)改善)サイクルのPDC'までを、地域活動を通じて実施します。さらに、計画書と報告書の作成指導に特に力を入れ、具体的な目標を設定して活動し、根拠に基づいて達成度を評価するよう指導を行うことで、何をどのように書けばいいかを学びます。

また、特定の専門職だけで解決できない地域の課題において、いかに異分野の専門職と連携していくかを学びます。大学でチーム連携の学びをしておけば、経験値として大きな強みになるでしょう。特定の専門職だけで行う協働とは違うことを、カリキュラムの中できちんと学ぶことができます。

従来であれば、社会での実践で身につけていくべき能力の一部を、大学の学びの中で習得するということです。

地域の課題を解決するための実践力を備えた専門職として、卒業後、力強いスタートを切るための大きな自信となるでしょう。